

2019年11月14日(木)

老球の細道510号

Bリーグ試合雑感

会津バスケットボール協会 室井 富仁

日本のプロリーグ「Bリーグ」4シーズン目が開幕し、先週で第9節目を終了した。私は今シーズンも「ゲームディレクター」の仕事を依頼され、先週で5回目の仕事を終了した。特に今回は第8、9節と4試合連続に立ち会い、色々な感想を得ることができた。

11月9日(土)10日(日)福島で行われた福島ボnz対西宮ストークスのゲームはチームの戦略、戦術が明確で非常に勉強になった。特に西宮は身長で勝るため、セットオフenseにおいては徹底してセンターのビックマンにボールをつないでからオフenseをしていた。リードしてもされても4Q徹底してこのオフense戦術をやり通していた。「徹底する」ということはこうやるんだということを強烈に示してくれた。うまくいかなくてもぶれない。だから土曜日のゲームは負けても、日曜日のゲームでは楽勝となった。

チームのストロングポイントというのは、相手に読まれていても抑えることができないということである。相手に対応されて、すぐに通用しなくなるのはそれにはなりえない。相手に読まれても、対応されても抑えることができるのが「本物の特徴、長所」と言える。そこまでスキル、プレイ熟練させなければならない。

ヘッドコーチのゲームに対する執念もすさまじい。特にレフリーのジャッジに対するリアクションは容赦がない。私が現役コーチの時はレフリーのジャッジより自チームの選手の不甲斐なさのほうにベンチリアクションが向いていたが、生活のかかるプロフェッショナルは事情が違うようだ。

それ以上にすごいのがレフリーの毅然たる姿勢である。ジャッジの正否についてはよくわからないが、コーチ、選手、観客からのクレーム、罵声などには決して動じないで淡々と判定を下す姿は素晴らしいの一言に尽きる。3人のレフリーが「クルーチーフ」のリーダーシップの元、応援や音楽などの騒音の中、しっかりしたチームワークでコミュニケーションを図り、責任を持ってゲームを仕切る姿はプレイヤーと同じようにかっこいい。

ところで、B2のゲームを見ていると、日本人選手の中には高校、大学の強豪校出身者は少ない。しかし、ここ数年見ていると、そのような無名選手たちが確実に力をつけて、ブランド選手たちの実力に迫っている。プロになってからでも本人の努力と自分を活かしてくれる環境の元ではまだまだ伸びるということである。いわんや、ミニ、中学、高校で伸びが止まるということは悲劇である。

プロバスケットボールはNBAだけではない。おらが町のBリーグもある。世界的なコーチが日本でも指導するようになってきた。ディフェンスの激しさ、シュートフィニッシュの厳しさ、ゲームになるとコートの中でさっぱりしゃべれない会津地区の選手たちにはコミュニケーションの重要性など勉強になることが満載である。

猪苗代カメリーナ、あいづ体育館で開催されたゲームの観客数の少なさには驚かされた。地元でできた念願のプロチーム、バスケットボール関係者皆で盛り上げて、会津からもコーチ、プレイヤー、レフリーが今後多く輩出されることを願う。現在ではプレイヤーで山形ワイヴァンズの上杉翔選手(坂下高校一拓殖大学卒)、レフリーで芳賀聡氏(福島県バスケット協会審判長、S級)の2名のみが会津産である。次は誰だろうか。